

第6章 対決青葉学院

墨谷二中にとってはじめて体験する地区予選大会決勝戦、対青葉学院との決戦の日がやってきた。全日本野球大会への進出をかけた一戦である。

6・1 対決の朝

谷口「さあて、いよいよ青葉と決勝戦だ！」

谷口は起きるとまくらもとにおいてあったバット、グローブ、ユニフォームを確認した。昨日は緊張のためかあまりよく眠れなかった谷口だったが、目ざめはよかった。待ちに待った決勝の日がやってきたからである。

となりの部屋から両親の声がきこえてくる。

母「ぼちぼちおこしたほうがいいんじゃないのかい」

父「よせ、ゆうべはあまりねられなかったみたいだからな。タカのやつよっぱど緊張してたんだろうな、夜中に三度もトイレにいきやがってよ。」

母「そういうとうちゃんは、四度もいったじゃないか、まるで子どもなんだから。」

父「ということはおめえもねてねえってことじゃねえか。」

母「とうちゃんじゃあるまいし、あたしやめざといタチなんでね！」

父「ぷっ！」

谷口「おはよう！」

母「なんだい、おきてたのかい、はやく顔をあらってきな！」

谷口「すごいごちそうだね。」

父「あたりめえよ、決勝戦だからたっぷり栄養をつけなくっちゃな！　みる、弁当だってデラックス版よ、おめえのすきなおりまきだのおいなりさんがどっちゃりよ。」

母「ちよつと、とうちゃん、なんだいそりや…」

父「これはおチャケ……」

母「バカだね、お花見じゃないんだよ。じゃあ、あたしもお茶もっていこつと。」

父「なんだ、おめえもいくのか？」

母「あたしがいつてわるいのかい？」

父「い、いや、そういうわけじゃねえけどよ。」

谷口だけでなく父、母ともにこの日を楽しみにしていた。

6・2 選手更衣室

広い選手更衣室をふたてにわかれて墨谷と青葉がユニフォームにきがえている。青葉学院のほうでは墨谷ナインのようすをみながらなにやら話をしている。

二軍遊撃「なんだ。あいつらのユニフォームボロボロじゃねえか。」

二軍左翼「うちとやるってんでそうとう練習したんだろう。」

二軍遊撃「そういやあ、こないだくんがくにきてたな。」

二軍左翼「なかなか研究熱心じゃないか。」

こちら墨谷二中は谷口が試合前の注意をナインに話をしているところであった。

谷口「いいか、みんな決勝戦だからって緊張したらダメだぞ。いままでの練習の成果をじゅうぶんだしきるんだ……」

話をしているときに昔顔なじみだった青葉学院の山下が声をかけてきた。

山下「よーっ、谷口じゃねえか。」

谷口「やあしばらく!」

山下「なんだおまえ墨谷にいったんか。きょうの試合にでるのか?」

谷口「ああでるよ。」

山下「へーっ、ほんとかよ出世したもんだなあ! おいちょっと、ちょっと、谷口が試合にでるんだとさ……」

墨谷部員「……」

山下は同じく顔見知りの吉田をよぶが、吉田はおおあわてで山下を墨谷ナインからひきはなそうとしている。

吉田「バ、バカなことをいうな! 谷口は墨谷でキャプテンをつとめているんだぞ。」

山下「あ、そう、な、なにーっ、キャプテンだって!! あ、わるいこといっちゃったかな…、ま、おたがいにがんばろうや。」

谷口をあとにして山下は青葉学院のほうにむかう。谷口をのぞく墨谷ナインは山下のほうをにらみつけていた。

山下「おれも墨谷にいきやあよかった……」

6・3 応援席

とうとう試合がはじまる。両チーム整列し試合前のあいさつが終わった。

墨谷応援席では大きな声で墨谷ナインを激励する声がかかっていた。

「フレッツ、フレッツ、す、み、や!」

「フレフレ墨谷、フレフレ墨谷ーっ!」

対照的に青葉学院応援席はしずかである。それもそのはずだれも応援にきていないのである。全国大会優勝があたりまえの青葉にとって地区予選の決勝戦なんかは勝つに決まっている試合であり、眼中になかったのである。

ピッチャー松下が投球練習しているとき谷口が声をかけた。

谷口「その調子、その調子、おちついていこうぜ!」
松下「はい!」

はじめての決勝戦ということで松下はやや緊張している。

6・4 一回表青葉の攻撃

「プレイボール!」審判の合図でとうとう試合がはじまった。松下の一球目はストライク、じょうじょうのであしのようなのである。が、松下の投球を見てやや青葉学院ベンチでは部長をはじめとしてとまどいの表情があった。

青葉部長「なんだ、いまの…スローボール投げたのか？」
二軍捕手「さあ…」

審判「ストライクツー！」
谷口「ナイスピー、その調子だ！」

二軍捕手「べつにスローボールってわけじゃないですね。」
青葉部長「しかしまあ、あんなタマでよく決勝まで勝ちすすんでこれたな。」
二軍投手「まったく！」
青葉部長「バッター、ふりきっちゃいかん、ボールにあわせていけっ！」

ツーストライクからの三球目、バッターがはじめてバットを振った。…がレフト側スタンドに入るファール、松下のタマが遅くタイミングがとれないらしい。

青葉部長「ふりきっちゃいかんといってるだろ！」
二軍中堅「は、はあ、おかしいなあわせただけのつもりだが…」
松下の四球目やはりレフト側のファールになる。青葉のトップバッターはたまたまらずタイムをとり、青葉ベンチに向かう。

二軍中堅「タイム！」
二軍左翼「どうしたんだよ？」
二軍中堅「重いバットでなくちゃとてもまぢきれないよ。」

バットをかえて、バッターボックスにたった。

松下からの五球目をかるくあわせて左中間にはこぶ二塁打となった。

センター浅間の返球をうけたイガラシはすでに二塁ベース上に立っているトップバッターの足の速さにおどろいた。

つぎは二番バッターである。二番バッターも初球をふりきり一番バッターと同じようなレフト側ファールにしてしまう。

青葉部長「ふりきっちゃいかんといってるだろ！ バカめ！」
二軍左翼「すみません。やりにくいね。」

二軍左翼「こんなもんかね。」

二番バッターの打球はレフト遠藤とセンター浅間とのあいだにとぶ平凡なフライだった。谷口からは「レフト！」のこえがかかる…しかしレフトとセンターがぶつかってしまい打球はグラウンドをてんでんとする。谷口がバックアップするが二塁ランナーはかるがるホームインし、結果は三塁打となってしまう。

応援席からは取れる打球だったので「もったいねえな…」の声があがる。
一点をとられまだノーアウト三塁のピンチがつづく…

三番打者の打球はライト前にあがった小飛球だった。島田が前進しがっちりおさえるが、とつたことに満足してしまってバックホームを忘れてしまう。三塁ランナーはタッチアップから勞せずして二点目のホームをふむ。

ナインの動きがぎこちないのを見て谷口がタイムをとってマウンドにナインをあつめた。

谷口「みんなおかしいぞ、あいてが青葉だからってあがっているのか？ おれたちはやるだけやったんだ、リラックスしてやればごかくに戦えるんだぞ、いかみんなおちついていくんだぞ！」

部員「はい！」
谷口「さあ、バッター四番だぞ、がっちりこうぜ！」
部員「オウ！」

四番打者もかるがる松下のタマを三遊間にはこぶが…谷口が横つとびでおさえて、すばやく一塁に投げた。

「アウト!」

応援席からは「ナイスサード!」、「いいぞツーアウトだ!」の声がとんだ。
青葉学院ベンチでは…

二軍二塁「あのサードけっこうやるじゃねえか。」

二軍遊撃「うむ…」

二軍二塁「もっともあのぐらいやってもらわないとしまらないからな。」

二軍遊撃「まあな…」

つぎの打者もセンターオーバーかというあたりだったがセンター浅間の好守備でアウトとなる。

審判「バッターアウト! チェンジ!」

谷口「ナイスセンター、その調子だ!」

松下はマウンドでホッと息をつき、ナインからはナイスセンターの声がかかる。
青葉ベンチでは…

二軍投手「へーっ外野もいがいにやるじゃねえか」

二軍中堅「うむ…」

二軍投手「おい、はやく守備につこうぜ。」

二軍中堅「あ、そうかチェンジだったな。」

二軍捕手「はやかっただなあ。」

二軍投手「たった二点じゃ三回でコールド勝ちできないぞ。」

二軍中堅「そうだな、いままで地区予選はぜんぶ三回コールド勝ちだからな。」

二軍捕手「なんとしても三回までに11点いれなくちゃ。」

結局一回表は二点をとられて攻守交代となる。

6・5 一回裏墨谷の攻撃

墨谷応援席からは大きな声がとぶ。

「かっとなせーっ、かっとなせーっ、すーみーやーっ!」

「かっとなせ、かっとなせ、すー、みー、やーっ!」

「かっとなせ、かっとなせ、すー、みー、やーっ!」

青葉ピッチャーが投球練習をはじめた。

吉田「部長、ウォーミングアップでしずかになちゃいました。」

青葉投手が投球練習をはじめたとたん応援席が静まりかえってしまふ。

「は、はい!」

「セカン!」

「ああ…」

「す、すげえ肩だ…」

またキャッチャーのセカンドへの送球の速さにもおどろいてしまふ。

審判から「プレイボール」の声がかかる。いよいよ墨谷の攻撃開始である。

トップバッターショートの高木への一球目は内角ひざもとへのストレートだった。

審判「ス、ストライク！」

高木「へんだなあ、こんなはずじゃないんだが…」

二軍投手「ふふ…」

二球目もストライクだった。高木はみおくるが、ベンチから谷口がとびだした。

谷口「タイム！」

谷口はバッターの高木をよびよせる。

二軍捕手「また、タイムのはやいこと。」

高木「特訓で練習したタイミングとちがいますね…」

谷口「バットをかえてあわせていけ！」

高木「どうも！」

二軍捕手「どう軽いのあった？ おたがいにバットで苦勞するね。」

二軍投手「ふふ…」

ツーストライクからの三球目、高木のバットからは「カーン！」という音をたてた。しかしサードゴロである。

二軍投手「あ…」

二軍三塁「おやおや、打ちやがったよ。」

一塁塁審「アウト！」

応援席からはおどろきの声があがる。

「あ、あのはやいタマを打ったよ。」

「へーっ、うちの野球部もやるなあ！」

「そういやあ、そうとうきつい練習してたもんな！」

「やるーっ！」

「さすがトップ！」

青葉ベンチでも…

山下「どういうことだ…？」

吉田「まぐれ、まぐれ、いままで地区予選でやつのボールにさわったやつがいたかよ。」

山下「それもそうだな。」

二番打者、ピッチャー松下は初球を打つがレフトフライとなる。

二軍左翼「あれあれ、外野にとんできたよ。」

松下「さんねん！」

応援席がいちだんとにぎわってきた…

「ま、また打った…」

「ナイスバッティング！ チクショウおしかったなあ！」

青葉ベンチでも…

吉田「外野にもっていかれたぜ…」

山下「やるじゃねえか、あいつら。」

二軍捕手「タイム！」

いつもと違ってがちがうので、キャッチャーがピッチャーにかけよる。

二軍捕手「どうもぜんぶ三振とはいかないようだな…」

二軍投手「まぐれにきまつてるだろう、いちいちくるなみっともない！ どうせやみくもにふってんだ。」

応援席からはつぎのイガラシに期待をかける…

「イガラシ、いっぱいつたのむぞ！」

イガラシ「まかしとけて！」

二軍投手「ずいぶんちっこい三番だぜ…、あ…」

イガラシは初球をバントした。ピッチャーはいひょうをつかれ、サードが処理するがイガラシは一塁セーフとなる。

「やった！ やった！」

「ナイスバント！」

「ついに一塁にでやがった！」

吉田「まぐれじゃないぜ、タマがちゃんとみえてなくちゃバントなんてできやしない！」

山下「う、うむ…」

二軍三塁「どうもようすがちがうな。」

いままでの試合と勝手がちがうことに青葉も気づいてきた。

「たのむぞ谷口！」

応援席から声がとぶ。

二軍捕手「タイム！」

イガラシ「おたくもタイムがおおいね！」

二軍捕手「いったいどうなちゃってんだ、べつにおまえの調子がわるいわけじゃないし…」

二軍投手「う、うむ…」

二軍三塁「つぎは四番だ、いちおうけいかいしていったほうがいいな。」

二軍投手「そうだな。」

青葉投手はセットポジションから谷口に投げるが、谷口は左中間をやぶる二塁打となる。イガラシは一塁からホームをねらうが…

審判「セーフ！」

「ナイス、バッティング！ いいぞ墨谷一っ！」

応援席からは歓声があがる。

吉田「て、点をとられちゃった…」

五番小山もかかんにうつが、ライトフライとなって二塁ランナー谷口残塁となりこの回の墨谷の攻撃が終わった。

審判「チェンジ！」

二軍左翼「うれしいね、ひさしぶりにてごたえのあるチームにぶつかったぜ。」

二軍一塁「よせよ…」

吉田「点をとられたのがそうとうショックだったんだよ。」

山下「地区予選はこれまですべてノーヒットでおさえてきたからなあ…」

二軍二塁「ようし、このへんでうちの力をおおいにみせてやろうじゃないか。」

二軍遊撃「そうだな！」

一回を終わって2対1青葉リードで二回をむかえた。

谷口「がっちりいこうぜ！」

この回青葉の先頭打者のあたりはセンターにぬけそうなライナーだったが、セカンドイガラシがバックハンドでとる。

青葉部長「よくとるな。」

つぎの打者のあたりをライト島田はフェンスにぶつかりながらも捕球する。

二軍左翼「ハハハ、またとられちゃた。」

サード谷口はラインぎわのボールをバックハンドでとり一塁に矢のような送球をする。

審判「アウト！ チェンジ！」

青葉部長「なかなかやるじゃないか、はやく守りにつかんか。」

二軍左翼「あ、そうか、チェンジでしたね。」

二軍捕手「三人でおわっちゃったぜ…」

二軍左翼「地区予選でこんなことは前代未聞だぞ…」

二軍捕手「みるよ、かえったらこつてりしぼられるぞ…」

二軍左翼「う、うむ…」

青葉部長「あのサードだろ、うちの二軍の補欠にいたというのは…」

吉田「は、はい。」

墨谷ナインをひっぱるキャプテン谷口の好打、好守備に、青葉部長はなぜあんなすばらしいプレイヤーが二軍の補欠だったのかわからなかった。

6・6 青葉エース登場

リラックスした墨谷ナインは特訓の成果を攻守にわたって発揮し、七回をおわったときは7対6と逆転していた。

青葉ベンチでは部長がベンチをみわたす。二軍ナインはそうすにビクビクするが…

青葉部長「佐野。」

佐野「はあ。」

青葉部長「このウラからおまえ投げろ。」

佐野「はい。」

二軍投手「ぶ、部長まってください。地区予選に青葉のエースをつかうんですか…、われわれの手でなんとかします。」

二軍捕手「そうですよ。」

青葉部長「なんとかできるか、ほんとに。」

二軍投手「い、いえ…」

二軍捕手「ど、どうも…」

佐野「しょうがねえな…、おいうけてくれ。」

一軍捕手「うむ。」

佐野「まさか地区予選にでるとはおもわなかったぜ。」

一軍捕手「まったく。」

審判「チェンジ！」

「いいぞ墨谷！ 三者凡退だ〜！」

佐野「やれやれ投球練習するひまもないのか。」
 青葉部長「ピッチャーこうたい。」

松下「や、やった、ついにエースをひきずりおろしたぞ。」

谷口「いよいよ一軍のエースの登場か…」

島田「い、いまなんていったんですか？」

谷口「きみたちはしらなかったんだな、青葉にとっちゃ地区予選など二軍の試合なれの場にすぎないんだよ。」

松下「…、というのであれば二軍なんですか？」

谷口「そうだよ。」

応援席からヤジがかかる。

「さっきよりずいぶんちっこいのがでてきたな、そんなんで墨谷の打線をおさえられるのかーっ！」

一軍エース佐野の投球練習がはじまった。応援席が静かになる。

「ああ…」

「お、おれみえなかった。」

「どうもおかしいとおもったよ、全日本で連続優勝する青葉をうちがぎゃくにおしてたんだからなあ…」

「一点リードしてたから期待してたのにがっかりさせやがるぜ。」

「まったくなあ。」

「もはやこれまでか。」

谷口「あのスピードだよ。」

部員「えっ…」

谷口「わからないか？」

「じゃないか！」

ほらっ、三分の一の距離から投げさせたタイミングと同じじゃないか！

谷口のことばに、ナインみんなピッチャーの投球練習に注目し、そのタイミングを確認する。

松下「ほんとだ。」

イガラシ「いよいよ、特訓の成果を生かすときがきた。」

審判「プレイボール！」

試合再開と思われたが、谷口がバットを持ってイガラシにかけよる。

谷口「タイム！」

佐野「熱心だね！」

谷口「だめだよ、それ重いバットだろ、自分のをつかえ！」

イガラシ「あ、いけね、さっきまでタイミングをあわせるために重いバットをつかってたんだっけ。どうも。」

二軍捕手「バットをかるくすりゃ打てるとおもってるんだから。」

審判「プレイボール！」

ピッチャー佐野は足を大きくあげてイガラシに対して投げこんだ。
 「カーン！」

佐野「う…」

二軍捕手「あ…」

イガラシの打球は左中間をやぶった。

墨谷ベンチからは「まわれ！ まわれ！」の声がかかる。

6・7 青葉一軍登場

イガラシの打ったボールは左中間をてんとする。青葉ナインはぼうぜんとたちつくす…

青葉部長「レ、レフトなにをやってるかーっ！」

レフトが打球を処理するも三塁打となる。

部員「やったーっ！」「ナイスラン！」

応援席、ベンチから大きな声で歓声があがった。

「いいぞーっイガラシーッ！」

「ナイスバツティング！」

佐野「……」

青葉部長「し、しんじられん…」

青葉部長「な、なにをしてる！ 一軍はからだをあつためておかんか！」

エース佐野が打たれたことで青葉ナインはマウンドに集まってきた。互いにイガラシに打たれた打球が信じられないという表情でただ立ちつくすだけだった。

審判「さあ、はやく守備につきなさい！」

青葉ナインは審判にうながされて守備についた。

ノーアウトランナー三塁でつぎのバッターは四番谷口である。応援はいやがうえでももりあがる。

谷口は青葉バッテリーの動揺を見逃さなかった。青葉をたたくのはいましかない。

応援席からは大きな声がとぶ。

「かっとばせーっ、かっとばせーっ、た、に、ぐ、ち！」

谷口は佐野の初球をおもいっきりたたいた。打球はサードのあたみをこえ、レフト線にかかる二塁打となる。

「やったやったまた一点追加したぞーっ！」

青葉内野陣はマウンドにあつまった。

二軍一塁「ど、どうなっちゃったんだ…」

二軍遊撃「なあにまぐれさ…」

佐野「まぐれでおれのタマが打てるか？」

二軍遊撃「い、いえ…」

佐野「どうやら、おまえたちにまかせたのがまちがいらしい、とてもおまえらのあいてじゃない！」

「うーて、うーて、こー、やー、まーっ！」

ノーアウトランナー二塁で小山が打席にたった。

そのときである、セカンドにいる谷口に矢のような牽制球が佐野の手から投げられた。谷口は逆をつかれた…

谷口「し、しまった…」

タイミングは完全にアウトだったが、セカンドとの呼吸があわずセカンドがうしろにタマをそらしてしまった。谷口は三塁へむかう。

審判「セーフ！」

「ナイスラン！ いいぞ谷口ーっ！」

応援席から谷口に声がかかる。青葉のセカンドはその場に立ちつくした。ピッチャー佐野はあんなタマも取れないのかというような顔でセカンドをにらみつける。セカンドは佐野のほうを見て「すみません。」とかぼそくいうのがやっとであった。青葉ベンチから部長が審判に選手交代を告げた。

青葉部長「セカンドこうたい！」

青葉学院はピッチャー佐野につづき、一軍セカンド中村に交代する

中村「バカが、なにをやってるんだ！」

二軍セカンドは中村の声を背中に受けうなだれながらベンチにもどった。

ノーアウト三塁、バッターは五番キャッチャー小山である。小山も初球をたたくが：

小山「く、くそっ、サードゴロか！」

小山のサードゴロを三塁手が一塁に投げるふりをして三塁ランナーをアウトにするトリックプレーを見せるが谷口にみやぶられる。

「うまいぞ谷口！」

「ノーアウト一塁、三塁だーっ！」

佐野「なにつったっているんだよ。」

サードとサードカバーにはいったショートはみずからベンチに向かって走っていく。

青葉部長「そろいもそろってなんてザマだ！ サード、ショートこうたい！」

佐野「たのむぞ！」

後藤「まかしとけて！」

チャンスが広がり応援にも力がある。ノーアウトランナー一塁、三塁で六番のファースト加藤に打順がまわった。

「うーて、うーて、かー、とー、うーっ！」

応援の声を背中にうけて加藤は打席にはいるがサードゴロとなって一軍サード、一軍セカンド、ファーストとわたるダブルプレーとなってしまう。

今までの二軍の守備とちがい一軍のプレーをまざまざとみせつけられた。墨谷側応援席からは

「谷口がサードにくぎづけじゃねえか」

「それよりも打者もファーストランナーもはんぶんも走らないうちにアウトだぜ。」

「これが青葉の一軍なんだ……」

といった声がかこえた。

ツーアウトランナー三塁となった。バッターは七番センター浅間である。内野陣がてあつくなったため浅間は外野をねらうが：サード後方にあがったレフト前のハーフライナーにショートのファインプレーがでる。

墨谷ベンチはあぜんとする。

谷口「あれだよ、一軍のプレイは……」

6・8 最終回の青葉の攻撃

谷口「さあ、いよいよさいごの守りだ、一点のリードを守れば勝てるんだぞ！ おちついてひとつひとつかくじつにアウトにしていこう！ ただしこれからは一軍がくわわってくる。打球が強いから気をつけろ！」

部員「はい！」

谷口「さあいこうぜ！」

部員「おう！」

応援席からも声がとぶ。

「がんばれよ！」

「しっかりな！」

青葉部長「バッターこうたい！」

二軍投手「やつのたまはおそいからじっくりまったほうがいいですよ。」

藤田「二軍のくせにいつから意見ができるようになったんだ？」

二軍投手「す、すみません。」

審判「プレイボール！」

松下「さっそく、一軍の登場か…、打たせて行くぞ！」

部員「おう！」

交代した一軍センター藤田は一球ようすをみた。

藤田「しょうがねえな、二軍のやつら。こんなスローボールにてこずってやがって…」

バッター藤田は二球目をあわせるかんじでバットをふった。レフトフライと思われた打球はぐいぐいのびて前進してきた遠藤の頭の上をこえていった。

遠藤「い、いったいなんて打球だ…」

谷口「がちりいこうぜ！」

遠藤「は、はいっ。」

ノーアウトランナー三塁で青葉の攻撃がつづく…

青葉部長「バッターこうたい！」

谷口「おちつけ、一点ぐらいやったってかまわないんだぞ、それに一軍はここまです。」

松下「そうですね、あの打者が14人目ですからね…」

「カーン」松下のあたりをバッターはセカンドイガラシの頭上をこえて、フェンスにあたるライナーをうつ。

一点かえされてまだノーアウトランナー二塁のピンチがつづく…

青葉部長「バッターこうたい！」

谷口「タイム！」

谷口がサードから球審のもとに走っていく。

谷口「青葉はすでに14人でいます！ もうメンバーチェンジはできないはずですよ！」

球審「なるほど、そういうば…、抗議をみとめる！」

青葉部長「ちよつとまで！ だれがそんな規則をきめたんだね？」

谷口「中学でも高校でもプレイができるのは14人ってきまつてるでしょう。」

イガラシ「常識だよそんなこと！」

青葉部長「なにをいっとるんだね、全日本中学野球大会の規則書にはそんなことはかいとらんよ。」

球審「ちよつとまってください。」

審判員があつまって規則書を調べるが…

球審「なるほど…」

塁審「しかしかいてないからついでいままで14人いじょうつかったチームなんてきいたことがないな、常識からすればやはり14人が正當じゃないかな…」

球審「それもそうだな。」

青葉部長「そういうあいまいなことではこまるなあ、ハハハ…、われわれは規則書にしたがって試合をしとるんだよ。14人までとかいとらंनीじょうなんんつかおうとかまわんことじゃないかね。」

球審「し、しかし…」

青葉部長「なんならそういう規則にして再試合をしてもかまわん！ まあ結果はやるまでもないが…」

球審「やはり規則書にのつてないいじょう…」

塁審「うむ…」

球審「では代打をみとめます。」

青葉部長「さあいけっ。」

谷口「しかたがない守ろう！」

イガラシ「まったくふりかまわねえんだから。」

青葉部長「全日本野球大会のためにも強いチームが勝つべきなんだ！」

中村「よかったですね部長！」

青葉部長「ダ、ダメレ！ わ、わしゃこんなにはじをかいたことはない！」

ベンチにすわった青葉部長は身体をふるわせながらどなった。

小山「がっちりいこうぜ！」

部員「オウ！」

小山が声をかけるも…つぎの打者に松下はホームランを打たれてしまう。

青葉部長「これでいいんだ。」

逆転して青葉部長はつぶやいた。

谷口「タイム！」

谷口のことばに塁谷ナインはマウンドにあつまった。

谷口「気をおとすな、たった一点リードされただけじゃないか！ いいか人数に制限がないとなれば敵は全員一軍にかえてくる。打球にはじゅうぶん気をつけろ、するどいからな！」

部員「はい！」

谷口「みんな、ひとつひとつがっちりいこうぜ！」

部員「オウ！」

佐野「どうやらこれできまったかんじだな…」

一軍三塁「うむ！ しかしやつらもよくやったよ！」

一軍遊撃「まったくこんなに苦戦するとはなあ…」

しかし塁谷は青葉に連打を打たれてこの回いきよ五点をうしなってしまう…

松下「す、すいません…」

谷口「なにをいってんだ、たったの三点リードされただけじゃないか！」

小山「よわねをはくなんて松下らしくないぞ。」

松下「し、しかし。」

加藤「うちは後攻なんだぞ、倍にしてかえしてやるぜ。」

浅間「そうとも！」

松下「わかった…」

応援席もただただ青葉のすさまじい攻撃にちんもくしてしまっただが、谷口の父親が応援席最前列にでて応援の指揮をとる。

父「どけ、どけっ。」

応援団「…と」

父「おつやじゃねえんだ、パーッと景気よくやんねえか。」

父「フレー！ フレー！ すー、みー、やー！ それっ！」

墨谷生徒「だれだ、あれ…」

墨谷生徒「さあ…」

父「ゴチャゴチャいってねえでいっしょにやらねえかい。」

墨谷生徒「は、はいっ。」

父「フレー！ フレー！ すー、みー、やー！ それっ！」

「フレーッ！ フレーッ！ すーみーやー！」

谷口「と、とうちゃん。」

松下「ようし。」

逆転されてきおちしていた墨谷ナインに応援席が元気づけた。

6・9 松下負傷！ ピッチャーイガラシ

九回の表青葉の攻撃中…青葉学院三点リードでランナーはいないもののまだノーアウト…バッターの打ったタマはピッチャー松下の右肩を直撃した。はじかれたボールを谷口がバックアップして一塁に送球するもわずかにバッターの足がはやくセーフとなる。しかし松下が右肩をおさえてたおれている。

小山「ま、松下！」

松下「うう……」

谷口「だ、だいじょうぶか！」

ナインがマウンドにかけよった。松下はおきあがるが…

谷口「ちよつとみせてみる！」

松下「いえ…もうだいじょうぶです！」

つぎの打者に対して一球目を投げようとした松下だったが、右肩をあげたとき激痛がはしりふたたびマウンドにたおれてしまう。

谷口「タイム！」

谷口「だいじょうぶか…」

浅間「しっかりしろ…」

松下を谷口と浅間がだきかかえてベンチにはこんだ。

谷口「だれかタオルをぬらしてこい！」

島田「は、はい。」

審判「そのようすじゃこうたいするしかないね。」

遠藤「こうたいするにもかわりのピッチャーがいらないんです…」

審判「それじゃ気のどくだが棄権しますか？」

谷口「じょうだんじゃなく、ここまできて試合をすてるなんて…」

高木「ま、まだ投げさせるんですか？」

谷口「おれが投げる！ 丸井セカンドにはいつてくれ、イガラシはサードをたのむ！」

加藤「キャプテン、投げたことあるんですか？」

谷口「いや、ない。しかしこうするしかしたがないだろ、さあいこう！」

小山「じゃあ、ぼくがなんとかリードします…」

谷口「たのむ！」

マウンドで谷口が投球練習を開始した…

イガラシ「ちょっと、キャプテン…プレートにスパイクをかけるんですよ！」

谷口「こうか？」

イガラシ「そうそう。」

谷口「どうだ？」

イガラシ「もうすこしスタンスをひろげたほうがいいですね。」

谷口「スタンスね…、おまえくわしいな。」

イガラシ「ええ、まあ。」

谷口「投げたことがあるのか？」

イガラシ「ひととおりぜんぶのポジションをやってみましたから。」

谷口「ちょっと投げてみる。」

イガラシ「どうかな、しばらくやってないからなあ。」

谷口がイガラシにボールをわたした。今度はイガラシが投球練習をはじめようとしている。このような様子を見ていた青葉ベンチでは…

佐野「なんか、草野球じみてきたな…」

中野「うむ…」

イガラシが小山に投げた。小山のミットからズバーンという音になる。マウンドではナインみんなびつくりした顔でみつめあう。

青葉部長「なかなかいいタマをほうるじゃないか。」

中野「はじめからだしいいものを…」

中村「まったく！」

結局ピッチャーがイガラシ、セカンドが丸井に交代して試合が再開される。

審判「プレイボール！」

イガラシの一球目は内角へのシュートボールだった。バッターはみおくるも二球目同じコースのシュートボールを三遊間に打たれる。

ノーアウトランナー一塁、三塁まだまだ墨谷のピンチはつく…

二人目のセカンド中村に対しても同じようにイガラシは内角へのシュートで攻める。中村の打った打球は谷口へのサードゴロとなる。サードランナーをけんせいし一瞬セカンドへ送球しようとしたが、セカンド丸井が試合からとうざかっていたことに気がつき一塁に送球する。

これでワンアウト二塁、三塁となった。

青葉部長「ちょっと…、いまのシュートしずまなかったか？」

中村「え、ええ、そういえば手もとにきてすこしおちたかんじです。」

青葉部長「タイム！」

青葉部長はバッターをよびよせ指示をだす。

青葉部長「どうやらしずむシュートでサードゴロにうちとるハラらしい。ひっぱらな
いでライトにながせ。」

一軍一塁「はい。」

青葉部長「万が一ゴロになったとしてもあのセカンドはあなのようだからな。」

バッターは指示どおりにライト方向へのヒッティングにでた。打球はセカンド丸井の横をぬけるかとおもわれたが、セカンド丸井がよこつとびで捕球し、すばやくバックホームする。ホームはクロスプレーとなったがアウトとなる。

谷口「ま、丸井のやつ…」

応援席からも声がかかる。

「いいぞーっ丸井ーっ！」

「ナイスセカンド！」

青葉部長「くそーっ、いっぱいくわされた…」

小山「ツーアウトだぞ、がっちりこうぜ！」

部員「オウ！」

青葉部長はつぎの打者に対しても指示をする。

青葉部長「内野はダメだ、なんとしても外野にもっていけ。」

藤田「しかし、まえのふたりはあのしずむシュートにつまっていますが…」

青葉部長「それがやつのねらいだ、だったらファールにしていけばいいだろ。」

藤田「あ、そうか。」

青葉はシュートをファールで逃げて、他のタマで勝負という作戦にでた。

藤田「ふふふ…」

イガラシ「くそっファールでにげようってんだな、そうはいくか！」

イガラシはゴロを打たせようとシュートを投げつづける。

藤田「まったくバカのひとつおぼえみたいにシュートしか…あ…」

審判「ス、ストライクバッターアウト！」

イガラシのしつようなシュートのあと、最後はカーブでバッターは三振する。

バッター藤田はあぜんとした顔でイガラシをみるが…イガラシは笑顔でこたえた。

藤田「き、きったねえあいつ！」

小山「ぶっ…」

応援席からはイガラシの好投に声がかかる。

「ナイスピーツ！」

「うまいぞ、イガラシ！」

6・10 三点差をおう最後の攻撃

最終回、九回の裏墨谷最後の攻撃である。得点は九回の表、青葉がいきよ五点をついたため11対8、三点を墨谷がおいかける形となった。

谷口はベンチ前でナインに最後の注意をあたえていた。

谷口「さあ、みんななくてもわらってもこれが最後の攻撃だぞ！ いいかタマに

くいついていけよ！ なんとしても三点をはねかえすんだ！」

部員「はいっ！」

この回はラストバッターライト島田からの打順である。

島田「ようし、なんとしても塁にでるぞ！ さあこいつ！」

島田は初球をひっぱって三遊間をぬくかと思われたあたりだったがシュートがうまくまわりこんでアウトとなってしまう。

高木「くそっ。」

谷口「た、たのむぞ！」

高木「まかせといてください！」

高木「さあ、きやがれ！」

高木の打球はセンター前にころがった。一軍センターがもうダッシュしてきて一塁に送球する。

審判「セーフ！」

二番加藤は右中間のまん中にとぶ、センターとライトがおいかける。だれもがぬけたと思うあたりだったがセンター藤田がジャンプしてこの打球をとった。

一塁ランナー高木はぬけたと思って二塁に向かって走りだしていた。とられたのをみて一塁ベースにいそいそでもどる。センターからのボールが一塁にもどってくる。高木がすべりこむ：審判の判定は：

審判「セ、セーフ！」

青葉部長「どたんばでやっとうちらしくなってきたな。」

吉田「あとひとつですね。」

墨谷応援席は：

父「ちくしょう…」

応援団「ツアウトになっちゃった…いよいよダメか…」

父「なにいつてやがる、おめえがそうだからダメなんだ。いせえよくバートとやんねえか！」

応援団「し、しかしあれで声がでますかね…」

墨谷生徒「……………」

父「それもそうだな…」

墨谷応援席は静まりかえっていた。

谷口はバッターボックスにむかう丸井に対してアドバイスをおくる。

谷口「丸井！ いいかものすぐくはやいからな、バットをみじかくもってなんとかあててけ。」

丸井「はいっ。」

谷口「たのむぞ！」

九回の裏、ツアアウトランナー一塁の場面で、松下のかわりに二番にはいった丸井に打順がまわった。谷口は激励をおくるが…丸井は特訓に参加していなかった…谷口は丸井も参加させておくべきだったと後悔する…ベンチにもどろうとしてナインを見るとみんなおどろいた表情で見つめていた。

谷口「どうかしたのか？」

谷口がふりかえると…

小山「みてください丸井のやつ！ あれ二本ともマスコットバットですよ！」

そこには元気よく「ビュッ！ ビュッ！」と音をたててバットをふる丸井の姿があった。谷口は九回表の丸井の好守備、そしてこのバットの振りぐあいといい、影でそうとう練習をやっていた丸井に気がつく…

谷口「丸井！ あてていくことはないぞ、おもいつきりひっぱたいていけっ！」

丸井「まかしといってください！」

佐野「さっきかわった補欠だな…」

丸井は佐野の一球目フルスイングをするが空振り、丸井はおもわずバランスをくずしてたおれこんでしまう。

小山「あああ…」

佐野「くくっ…」

丸井「いけね…」

ピッチャー、キャッチャー、審判までも失笑していた。谷口はベンチから丸井に声をかける。

谷口「丸井、やっぱりあててけ！」

丸井「すみません…さあこいつ！」

バッターボックスの丸井は気をとりなおし佐野の二球目を待った。

「カーン！」

丸井のバットから快音があった。打ったタマは三塁手左をぬくヒットとなる。墨谷ベンチから応援席から「や、やったーっ」の声がでた。ツーアウトながらランナー一塁、二塁で三番イガラシに打順が回った。

「かっとなせーっ、かっとなせーっ、イー、ガー、ラー、シート！」

応援席からの大きな声がイガラシの背中にとどく。

イガラシ「おれも打たなくっちゃ、こう丸井さんにかつやくされちゃポジションとられちゃうからな。さあこいつ！」

佐野「……」

青葉ベンチでは…

青葉A「またしがみついてきやがった…」

青葉B「まったくねちっこいチームだぜ…」

イガラシは佐野の初球を右中間に打つ。打球はフェンスに直接あたる二塁打となる。セカンドから高木がホームインして一点かえした。

墨谷ベンチ、応援席ともにおおさわぎである。それもそのはずツーアウトながらランナー二塁、三塁、一打同点で打順がキャプテン谷口にまわったからである。

それにひきかえ青葉ベンチでは

青葉部長「い、一軍をそろえたというのに、いったいどうなつとるんだ…」

山下「……」

二軍中堅「……」

谷口がバッターボックスにむかう。応援席からは「かっとなせーっ、かっとなせーっ、たーにーぐーちーっ！」の大きな声が…

青葉部長「ちょ、ちよつとバッテリー！」

青葉部長はピッチャーとキャッチャーをベンチに呼びよせた。

青葉部長「し、しんじられんことだが、ストレートに完全にタイミングをあわされてる。カーブでタイミングをはずせ…」

佐野「は、はいっ。」

審判から「プレイボール！」がかかった。応援席ではいままでベンチ上で応援団の先頭にたつて声をだしていた谷口の父親の姿が見えなくなっていた。タカオの責任重大な場面を見るにいかねて自分の席にもどるところだった。

父「とてもみちゃいられない…」

自分の席には谷口の母親がいたが、母親は両手で顔をかくしうつむいていた。

父「なんでえおめえもかよ。」

佐野の谷口に対する一球目は部長の指示どおりカーブだった。

審判「ス、ストライク！」

佐野の二球目谷口はタマをカットしファールにする。

審判「ファール！」

谷口「内野ゴロにしとめようって気らしいが、そうはいくか！」
佐野「味なまねをしやがる…これでどうだ！」

佐野のくりだす変化球を谷口は必死でカットした。

イガラシ「あ、ちくしょう、おれもやりたかったね！」

谷口は佐野のくりだす変化球をカットしなんとかうちやすいタマがくるのをまった。佐野の息づかいがあらくなってきた。

墨谷ベンチ、青葉ベンチともにこの谷口対佐野の対決をみつめる…

そして佐野の手からやややすっぱぬけたボールが…

佐野「し、しまった…」
谷口「き、きたっ！」

「カキーン！」

谷口は打った。打球はレフトフェンスに直接ぶつかった。レフトがおいかける。三塁からは丸井がホームインし一点差、イガラシが三塁を回ってホームをねらう…

レフトがキャッチャーに送球した。きわどいクロスプレーになった。すべりこんだイガラシ、タッチしたキャッチャーたがい審判の判定をみるが…

「アウト！」

「試合終了！」

その声をきいた青葉エース、佐野はマウンドにしゃがみこんでしまう。

しばらく二塁ベース上で立ちつくす谷口だったが気をとりなおしてベンチに歩みはじめた。ベンチにもどろうとした谷口だったが…イガラシがホームベースをさわったままたちあがらない…

谷口「どうしたイガラシ…？」

ホームベースにたおれたままのイガラシに谷口がかけよる。

谷口「イガラシ…」

審判「どこかケガでもしたのかね？」

谷口「いえ、だいじょうぶです、やるだけやったんじゃないか！ さあいこう！」

谷口はホームベースに倒れたままのイガラシを抱き起こそうとしたとき、あの気の強いイガラシが泣いているのがわかった。ナインがとびだしてくるが、みなイガラシの涙を見ておもわず涙ぐむ…

丸井「グス…」

谷口「メソメソするな！」

青葉部長「谷口くんとかいったね？」

谷口「はあ…？」

なにかを谷口に言おうとした青葉部長だったが、ふりかえった谷口の目に涙が光るのをみた。

青葉部長「い、いや、いいんだ…」

そういつて青葉ベンチの方に歩きはじめたが…

青葉部長「二軍などをだしてまったく失礼なことをした…しかしわからん…かれがう

ちの二軍の補欠にいただなんて…」

青葉部長には谷口の墨谷にきてのがんばりがわかるはずはなかった。
イガラシをとりかこんでいた墨谷ナインに谷口が声をかける。

谷口「さあ、みんなかえろう…、またつきがあるじゃないか！」

部員「は、はいっ。」

「みんな、よくやったぞーっ！」

「いいぞ墨谷ーっ！」

ベンチにむかって歩きだした墨谷ナインに応援席からおしめない拍手と歓声がおくられた。